政令指定都市・区制移行30周年

つなぐ。仙台

今月のテーマ

「学都」

政令指定都市・区制移行30周年に当たり、さまざまなテーマに沿って、これまでを振り返り、これからを展望していきます。

これまで　「学都仙台」の歩み

「学都仙台」の礎は、元文元年（1736年）の仙台藩の藩校「養賢堂」にさかのぼります。その後明治19年の仙台神学校（現在の東北学院大学）や同20年の第二高等中学校、同40年には東北帝国大学など高等教育機関が相次いで設立。今では、東北大学などの総合大学に加え、教育、福祉、薬学、工学など専門分野で優れた人材の育成を目指す大学10校が集積し、約5万人の学生が学び、約4600人の教員が教育や研究活動に携わっています。

平成18年には、充実した学びの環境を生かし、本市や県内の大学等から成る「学都仙台コンソーシアム」が設立。単位互換ネットワークの構築による学習機会の充実や、東日本大震災を受けて開設した「復興大学」による人材の育成などを図っています。また、泉区周辺の6大学と泉区まちづくり推進協議会、泉区の3者で協定を締結し、学生が地域の活動に参加するなど、本市と大学等との個別の協定に基づく取り組みも推進。大学や学生の力が地域づくりに生かされています。

集積された質の高い知的資源と、学術を受け入れやすい風土は、仙台の強みです。学都が持つ資源やネットワークを最大限に生かし、高度で多様な人材が集い、挑戦し、挑戦から学ぶ。そんな創造的な学びの実践がまちづくりにつながるよう取り組んでいきます。

在仙のイラストレーターの佐藤ジュンコさんが、取材時のこぼれ話をお伝えしていきます

インタビュー　地域と大学が連携し、まちも学生も共に成長

東北工業大学不破正仁（ふわまさひと）研究室は、平成28年から太白区生出地区のまちづくり活動に参加しています。今もなお美しい田園風景や里山など素晴らしい環境が残る生出地区ですが、人口減少や少子高齢化などの課題にも直面していました。そこで私たち学生は不破先生の指導の下、生出地区まちづくり委員会・太白区まちづくり推進協議会・太白区との協働により、生出地区を盛り上げるための活動に取り組んでいます。

その始まりは、地域の方に声を掛けていただいて始まった小さな空き家の改修から。地域のコミュニティー拠点となる場所をつくろうと、生出地区の方々と話し合いを重ねながら、改修作業を進めています。大そうじから着手し、天井や内壁の撤去、ペンキ塗りや床の張り替えなど、大掛かりな作業もたくさん。人手や体力が必要なので、若者の力が役立つことを実感しています。また私たち学生が関わることによって、まちづくりに理解や関心を寄せてくださる地域の方々が増えています。

空き家の改修をきっかけに、まちづくり活動は広がりを見せています。その一つが、地図作りです。まずは歴史的・文化的資源の掘り起こしのために、地元の方と一緒にまち歩きへ。住民には見慣れた何気ない景色でも、私たちの目には新鮮に映る魅力や見どころが多数ありました。それらを紹介する地図を作成し、情報発信に活用することで、地域振興につなげたいと考えています。

「そうじから始まるまちづくり」として、地域の宝探しを行うような気持ちで空き家に向き合うと、あらゆるものが学びにつながってきます

私たちは、学年も役割もさまざま。個人の力では限界がありますが、大学の研究室というチームであれば、まちに長く関わり続けることが可能です。その中で、私たちにとってはフィールドワークの場やチャレンジの機会が拡大し、また、交流が深まることで、信頼関係を育むこともできます。今後も生出地区をはじめ、まちと学びが連携する「学都仙台」で、地域と共に成長していきたいです。

東北工業大学工学部
建築学科　不破研究室

※（写真右奥から時計回りに）
不破正仁准教授、佐藤稜太さん、佐藤匡さん、武田雄大さん、千葉百華さん、吉田鷹介さん、佐藤裕典さん

■プロフィール／まちづくりをテーマに、地域の魅力の創出や活用について研究。地域などと覚書を結んでまちづくり活動などを行っている